

訪問者

あずさ第一高等学校町田キャンパス 三年 ナズキ 鈴木 はるな 晴菜

数ヶ月前から、僕には幽霊が見えるようになった。最初の頃は、毎日お化け屋敷の中で生活しているようで慣れなかったが、今は反対にこの境遇が少し愉快に感じられる。外を歩けば、様々な種類の幽霊が見られた。

数ヶ月前。仕事からの帰り道に、僕は交通事故にあった。信号無視の車とぶつかり、幽霊が見えるようになったのはそれからだった。

夕方。五時の鐘が聞こえていた。僕は今日も職場から家に帰る。四肢から血を流して道路に横たわる幽霊と、電柱の陰に立つ脚がない幽霊を横目に、僕は家路を急いでいた。

そんなときだった。アパートの近くの公園で、薄汚れた着物を着たおかつばの女の子が、ぼうつとこちらを見ていた。小学校低学年くらいだろう。顔色が肌の色とは思えないほど悪く、どう見ても生きていない人間ではない。着ているものから見るに、生きていた時代も随分昔のようだ。毎日がお化け屋敷というエンターテインメントの中にある僕にとって、このくらいのはよくあった。驚くことではない。しかし僕の目を引いたのは、その子の体勢だった。女の子は、子供が漕いで揺れているブランコの下に、うつ伏せに寝そべり、地面に頬杖をつけてこちらを見ていた。

「こんにちは」

遊んでいた子供たちが帰るのを待ってから、僕はその幽霊に声をかける。目に写すだけでなく、僕は幽霊と会話することもできた。

「どうしてこんなところに居るの？」

「ここがしーちゃんのお家だから」

自分のことをしーちゃんと呼ぶ彼女は、死んでからずっとこの公園に居るみたいだった。「ずっとずっと、ずーっと前。ここは私のお家だったの。もうなくなっちゃったけど、他に行くところもないから、しーちゃんはずっとここに居るんだ。」

「どうしてブランコの下なの？ベンチのほうが、横になるのは楽だよ。」

「私のお布団はずっとこの場所に敷いてあったから、寝るのはここがいい。ちなみになりはお母ちゃんの場合だから、お兄ちゃんは寝ないでね。」

隣のブランコの下を指して言うしーちゃん。

「僕はここでは寝ないから大丈夫。僕もお家に帰るところだったんだ。じゃあね。」

「うん。でも、お兄ちゃんが歩いてきたのは台所だから、できればあっちの玄関から帰ってほしいな。」

「玄関」と言っただけに、しーちゃんが指さした場所は、公園をぐるりと囲む植え込みの一角だった。仕方がないので、しーちゃんに挨拶をした僕は膝くらいまである植え込みのつつじを、よっころしよと跨いで公園を出た。お化け屋敷で暮らすということは、こういうことだった。

次の日も、しーちゃんは公園に居た。今日のしーちゃんは、素っ裸で砂場の砂に埋まっていた。入口から入ろうとしたが昨日のことを思い出し、わざわざつつじを跨いで入る。

「こんにちは。今日は、お風呂？」

「こっちは来ないですよ。恥ずかしい。」

そう言っただけで、砂をかけられてしまった。外で裸になる方がよほど恥ずかしいのではないかと、そういうことは幽霊には通じない。

僕はしーちゃんがお風呂から上がるのを待ち、しーちゃんの住んでいた家について教えてもらった。公園の入口から見て右奥の、ブランコの辺りが居間兼寝室。入口付近が台所。左奥の砂場がお風呂。そして植え込みの一部分が玄関。父親が死んでからは、この家で母と弟と自分の三人で暮らしていたらしい。

「ここですと、たーちゃんと一緒に母ちゃんを待ってたんだ。」

しーちゃんは、自分が死んだことに気づいていない類の幽霊ではない。生きている人間と同じように会話のできる幽霊は、自分が死んだことに気づいていないことが多かったため、しーちゃんみたいな幽霊は珍しかった。しーちゃんの母親は、しーちゃんと三歳離れたその弟を残して、ある日仕事へ行ったきり帰ってこなくなった。食べ物の蓄えは少なく冬の最中だったため、弟は一週間もたずに死んでしまった。自分も気づけば死んでいたという。胸が痛くなった僕は、鞆に入れていた鮭のおにぎりをしーちゃんにあげた。

「僕は仕事で毎日ここを通るから、また何か持ってくるね。おかしとか、たぐさん。」
「仕事になんて行かないでここに居てよ。」

「残念だけど、まだそういうわけにはいかないんだ。僕もほら、死んだら別だけど。」
「え？」

しーちゃんは、僕が死んだのを見たという。公園の前の交差点で車が僕にぶつかるのを見ていた。しーちゃんは、その光景を思い出したのか、酷く顔をしかめる。僕が先程まで普通のおにぎりに見えていたものは、気づけば形はひしゃげ、具は出、酷く変色していた。

審
査
員
講
評

「もしも幽霊が見えるようになったら？」という設定のもと、展開も伏線もじつに丁寧に描かれていて、素晴らしかったです。幽霊の「しーちゃん」にまつわる情報の明かし方も巧みです。細部もリアルで、実際に自分も体験しているかのような感覚になりました。

——
田丸 雅智